ピカイチ先生の
生活経営セミナー

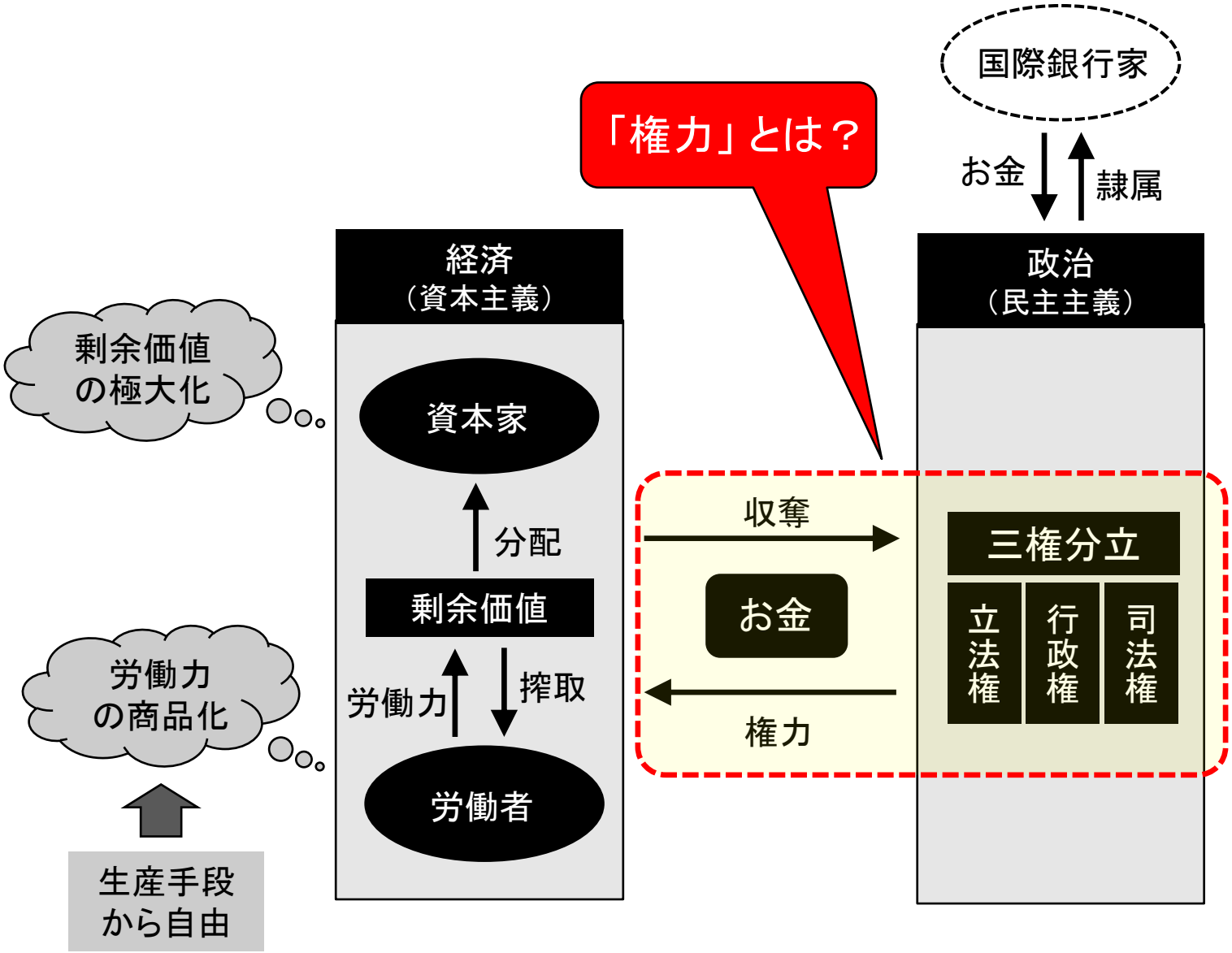
2022年01月
「お金」の法則
（⑩官僚主義の拘束）

ネクストライフ・コンサルティング
〒975-0038
福島県南相馬市原町区日の出町167-3
info@next-life-consult.com

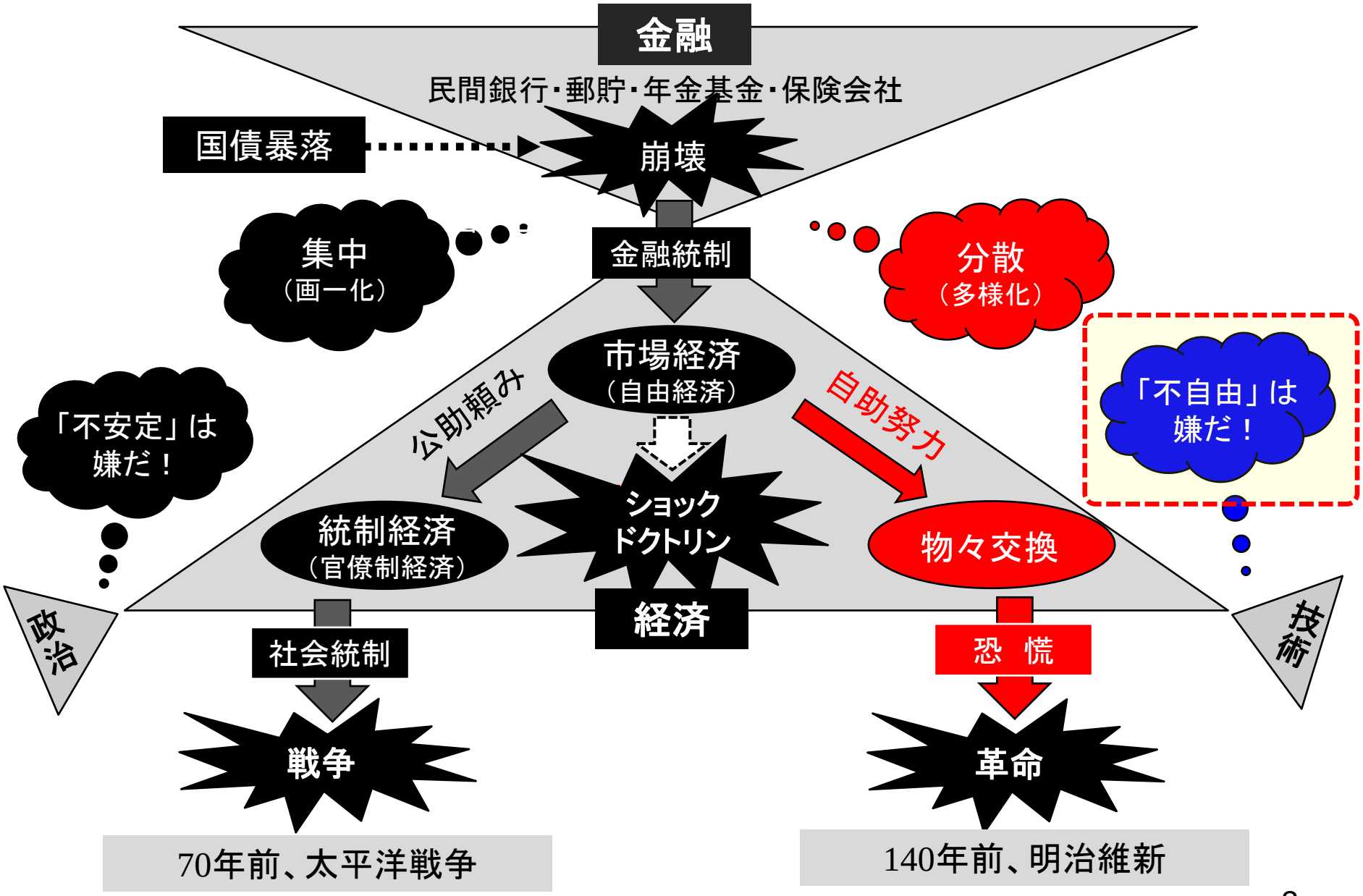
ピカイチ先生

ピカイチ生活経営塾　検索

【論点】資本制社会のしくみ



【論点】金融バブル崩壊とその後



【論点】いま私たちが抱える課題

「銀行家」が
「お金」で
「労働者」を
支配する

どうやって

「贈与者」を
「経済」から
「排除」する

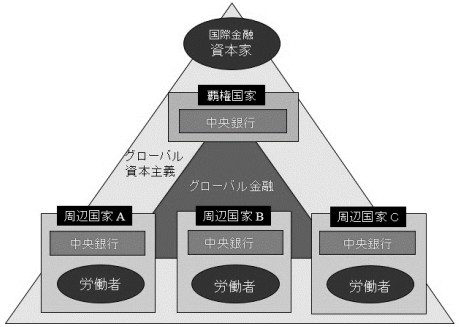
「官僚」が
「権力」で
「国民」を
支配する

どうやって

「個」を
「ムラ」から
「排除」する

世界共通の課題

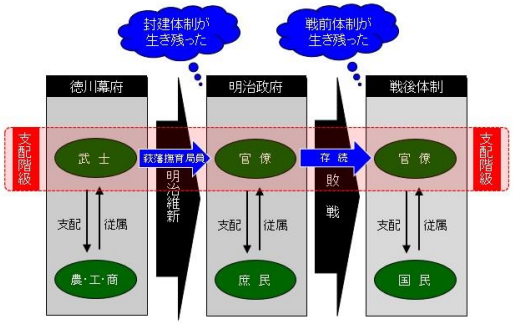
資本制社会の限界



資本主義の先へ

日本独特の課題

官僚制社会の拘束



官僚主義の先へ

「日本独特の課題」とは（1/6）

1998 年の 9 月のこと、イラン大使館から電話が入った。 なぜイラン大使館なんだろう、そんなことを思いながら話を聞いてみた。

すると私の書いた『お役所の掟』のペルシア語版を出したいとのこと。 そこで東京・溜池にあるホテルのロビーで会うことにした。

「どうしてペルシア語に訳したいのですか」と質問してみると、

「私は日本に赴任して 4 年目ですが、住めば住むほど日本が好きになってきています。 そして日本を知れば知るほど日本とイランには類似性があることに気がついたのです」

このような返答である。

「どのようなところが似ているのですか」ときいてみると、

「イスラム教はいうなれば『生活宗教』です。 だから宗教とはいうものの、日常生活を営むためにはどのようにすればよいのか、そこに重点がおかれています。『コーラン』とは、生活全般にわたる細かな命令が神から下され、その命令を記した書物だと考えてもよいでしょう。

『コーラン』とはイスラム社会で生活するためのマニュアルブックだといってもおかしくありません。 だからかもしれません、『戒律』を守ることがイスラム社会では一番重要とされているのです」

『危機日本の「変われない病」』（1998.11.20　宮本 政於）より

「日本独特の課題」とは（2/6）

「日本社会も『作法』に支配されたマニュアル社会ですよ」

「規則とは本来人々の生活を豊かにするためにある、私はそう考えています。でもイランも日本も規則を守るために人が存在しているように思えます。 規則を維持することが目的となり国民はそれに縛られていて、規則に従わない行動は裏切りと思われるのです。

日本でもいったん共同体へ属すると共同体の利益の追求が個人の利益に優先していますね。 防衛庁への水増し請求事件と防衛庁の幹部たちの対応がよい例です。 捜査が入ると防衛庁のトップ、それも警察庁から出向してきた人まで一緒に証拠隠しに奔走する。 部下は組織体に不利になるような証拠は命令どおり焼却処分にする。 こうした実態は共同体の戒律が重視されている証拠です。

共同体を裏切ってはいけない、ここにも共通した部分が見えてくるでしょう」

彼は続いて、「イスラムという言葉には『帰依（きえ）・服従』という意味があります。 しかもコーランは共同体の存続を第一としますから、個人の自由はないに等しいといってよいでしょう。

それが端的にあらわれているのが、女性はヴェールをかぶらなくてはならない、という習慣です。 見方を変えれば、こうした習慣は国民が個人として独立していないことの証明であり、自由が束縛されている証拠です」

『危機日本の「変われない病」』（1998.11.20　宮本 政於）より

「日本独特の課題」とは（3/6）

「日本の女性はそんな戒律に縛られていません。 そういった部分では日本社会のほうがずっと自由です。 日本とイランはやはり異なった文化圏にあるのですよ」

このような感想を述べると、

「女性に関する抑圧はたしかにイランのほうが厳しいでしょう。 しかし日本のサラリーマンの多くは壁に塗り込められたかのような色のスーツを着ています。 これはヴェールとスーツという違いだけで、個性の主張を避けている、すなわち各々が属している共同体で決められた規則に服従するという点では同じではありませんか。

その社会の価値観は服装を通して見ることができます。 無彩色に徹する、肌を見せない、これは個人の自由がないことで、服装に『服従』という考え方が集約しているように思えます」

「その見解は正しいですね。 ヴェールや目立たないスーツは、マニュアルに従った結果だといえますね。 しかもマニュアル社会は服従の精神を育てます。 当然、独立心の芽は摘まれてしまいます。

なぜ日本やイランで服従が重視されているのかを考えてみると、独立心が育てば既存の価値観を疑うようになり、その社会にとって脅威となるからではないでしょうか。 たしかに『服従』と『独立心』という観点からイランと日本を見ると、どちらも国民が規則に縛られていることがわかってきますね。『規則には絶対服従』と教え込めば、だれも規則には疑問を抱きませんからね」

『危機日本の「変われない病」』（1998.11.20　宮本 政於）より

「日本独特の課題」とは（4/6）

「ただイランから見ると日本はアジア諸国の中では欧米から近代文化をいち早くとり入れ、それが世界第二の経済大国の形成に結びついたとの認識です。 多くのイラン国民は、日本は自由競争を基本においた資本主義国家で民主社会だと思っています。 でも日本に住む時間が長くなると日本社会の矛盾が見えてくるのです」

「日本が民主国家だという部分には大きな誤解がありますね」

「私も日本で生活するようになって初めて誤解であるということがわかりました。危機におちいった日本経済、政治家、官僚たちの危機への対処のしかたなどを見ていると、集団主義の問題点がよく理解できるようになったのです」

いやはや、日本社会の実態をよく捉えている、そう思っていると彼は続いて、

「ところで書かれた本の中で、お役所では午後 3 時になるとラジオ体操の音楽がかかり、多くの人はいっせいに体操をする、というくだりがありましたよね。 あれはわれわれ信者が 1 日 3 回決まった時間にメッカの方向にひざまずいて祈る行動と、とてもよく似ています」

思いもかけない指摘である。 しかしこの指摘には考え込まされるものがあった。そこで次のようなことに気がついた。

『危機日本の「変われない病」』（1998.11.20　宮本 政於）より

「日本独特の課題」とは（5/6）

決まった時間に音楽が鳴ると、すかさず体操をはじめる。 この行動様式に特徴的なことは疑いを持たずに振る舞うことで、それは幼児が親の指示に従っているのと同じであり、すなわちラジオ体操とは従順を通り越して服従の精神の集約なのである。

この部分をもう一歩踏み込んで分析してみると、イスラムと日本の接点は、人間の自虐的な部分を奨励する価値観にあることがわかってきた。 これは困ったことだ。

そんなことを考えていると、

「『お役所の掟』の翻訳の話に戻りますが、この本をイラン国民に紹介すれば、間接的に集団主義の問題点を知ってもらえます。 自分勝手といわれるかもしれませんが、イスラムを直接批判するわけではないので私の身は安全です。

ここも日本に似た部分で、イランでは共同体とともに生きてきた人が直接共同体を批判することは裏切り行為と非難されるのです。 サルマン・ラシュディ氏は、イスラム社会に疑問を投げかけた『悪魔の詩』という本を書いただけで死刑を宣告されたのです。 私がなぜイランの人々に『お役所の掟』を読んでもらいたいか、それは、集団主義が個人の幸せに結びつかないというメッセージを送りたいからです」

『危機日本の「変われない病」』（1998.11.20　宮本 政於）より

「日本独特の課題」とは（6/6）

「いわば反面教師とするわけですね。 それは効果がある手法かもしれません」

私は「自由」とか「個人」とかいう考え方を重視する。 イラン大使館の F 氏からの要望が『お役所の掟』をペルシア語に翻訳したい、しかもそれがイスラム社会に「自由」や「個人」といった考え方を広めることにあるということであれば、私が喜んで同意したことはいうまでもない。

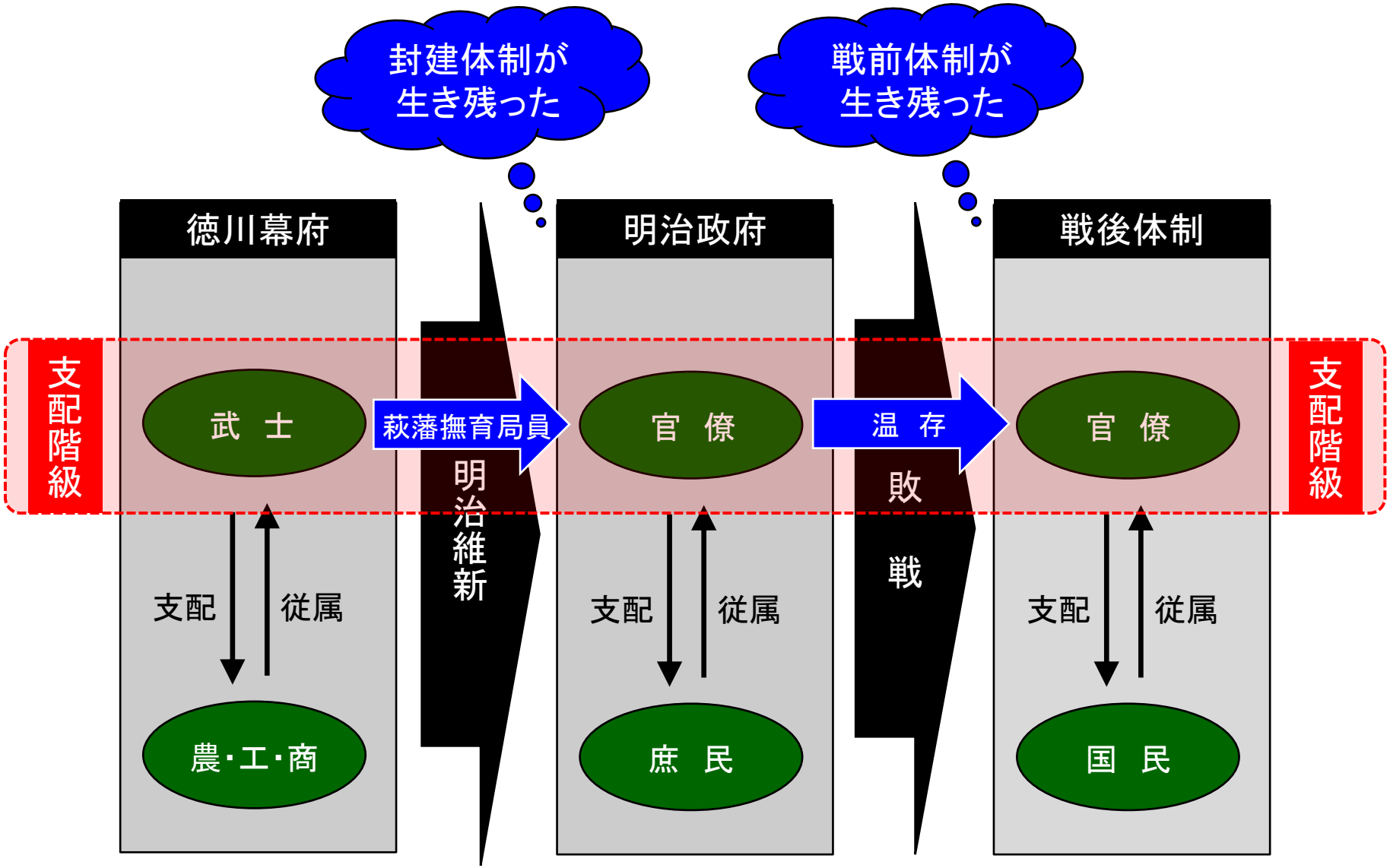
なぜイラン大使館員との会話を紹介したのか。 それは彼の指摘した内容が日本社会の問題点を示唆していたからだ。

この本は、イラン大使館員が示した日本的集団主義の問題点を具体的に示したものである。 そして 21 世紀に向けてグローバル・エコノミーの荒波の中を、どのように航海していったらよいのか、その方法を知る一助になるのではないか、そのような気持ちで執筆した。

読者もあらためてそのような視点からこの本を見てもらえれば、集団主義社会ニッポン、いや世界で一番成功した「共産国家」から脱出するための方途もおのずから浮かんでくるはずである。

『危機日本の「変われない病」』（1998.11.20　宮本 政於）より

官僚主義の沿革（1/10）


封建体制が
生き残った
戦前体制が
生き残った
徳川幕府
明治政府
戦後体制
支配階級
武　士
萩藩撫育局員
官　僚
温　存
官　僚
支配階級
明治維新
敗戦
支配
従属
支配
従属
支配
従属
農・工・商
庶　民
国　民

官僚主義の沿革（2/10）

本稿は、英文版『お役所の掟』（『STRAITJACKET SOCIETY』）に翻訳収録された序文の原文です。

■ 自分の姿を見るためには他者の目を借りねばならない　　伊丹 十三

・本書は、一人の現職の官僚によって描かれた、悪名高い日本の官僚世界の内側からのスケッチである。

・日本の官僚に関してはもとより様々な評価があるが、海外の読者のため、今ここで日本の官僚制のあらましの沿革と問題点を整理しておこう。

・1854 年、アメリカは、300 年の長きにわたり、外国に対して国を閉ざしていた日本に開国を強制した。

・そのころ世界は列強による植民地分割の時代であった。

・開国した日本も、遅ればせながら列強の仲間入りをめざした。

・そのためには国家の急速な近代化が必要であり、日本は国際社会に受け入れられるため、西欧に倣って憲法を制定し、法律を整え、天皇を君主とする議会制民主主義を発足させたのであった。

・列強に追いつくため「富国強兵」の策が採られた。

『お役所のご法度』（1995.03.01　宮本 政於）より

官僚主義の沿革（3/10）

・この国策を効率よく短期間で実現するためには、政府、すなわちエリート集団たる官僚が、蒙昧（もうまい）なる国民を強力に指導し、国家デザインに従って資源や人材を有効かつ重点的に運用する必要があった。

・このような支配の形態は当然官僚に絶大な権限を与えることになるが、その点に関しては、長年大名や侍の支配下にあった日本の国民たちは、いわば権力に飼い慣らされていて、官僚支配を自然に受け入れたようである。

・以上のような状況でスタートした日本の官僚制は、当然のこととして次のような前提を持つにいたった。 すなわち「民は愚かであって指導者を必要とする」、また「愚かな民が選んだ代議士もまた愚かであり、陰で官僚が支えてやらねばならない」というものであって、これは今日でも全く変わっていない。

・さて話を少し飛ばそう。 上記の方針を徹底的に遂行した結果、日本は曲がりなりにも世界の列強の仲間入りを果たし、ついには米英と戦端を開いて敗北するにいたる。

・戦争中は、戦争遂行という至上の目的のため 政府＝官僚 による統制は国民生活のあらゆる細部にまで及び、議会や政党は名ばかりのものとなって、ここに「天皇の官僚」の権限は類を見ぬ絶大なものへと肥大していったのである。

・さて、日本は戦争に敗れ、戦勝国アメリカは、日本をアメリカ流の民主主義国家に作り替えるという仕事にとりかかった。 アメリカはとりあえず日本国憲法を作って日本に与え、デモクラシーの根幹たる「三権分立」と「地方自治」の定着をはかった。

『お役所のご法度』（1995.03.01　宮本 政於）より

官僚主義の沿革（4/10）

・まず三権分立から見てみよう。 アメリカが作った日本国憲法によれば「国民によって選ばれた国会が日本における唯一の立法機関である」というのだが、もしこれがマジで実現すると官僚は立法行為から排除されてしまい、国をコントロールする力を失ってしまう。 これは官僚にとってはゆゆしい危機であった。

・そこで官僚たちは、憲法の中に官僚による立法行為の禁止の条項がないのを利用し「内閣法の中に」官僚による法律の提案権を忍び込ませてしまった。 また、折角提出した苦心の法案も「愚かな代議士」によってボツにされてはかなわない。法案の審議も自分たちでコントロールしようと、官僚たちが政府委員として国会の審議にも参加できることを「国会法に」書き込んでしまう。

・結果として、もともと法律を作るような専門的な仕事に向いていない国会議員たちは、自分たちの存在理由たるべき法案の作成をすべて官僚に任せることになってしまった。 また、法案の審議も、官僚の作った質問と答えを、議会と政府とがあたかも台本を読み合うかのごとく読み合うだけの形式的なものになってしまい、結果として日本では「官僚こそが日本における唯一の立法機関」になってしまって今日に至っている。

・地方分権に関しても同様なことが起こった。 そもそも官僚の理想とするのは中央による強力な地方支配である。 アメリカ流に「日本が各州に分かれ」各々の州が「州民によって選ばれた知事のもとにそれぞれの議会と法律と警察を持つ」などは官僚のもっとも好まぬところであった。

『お役所のご法度』（1995.03.01　宮本 政於）より

官僚主義の沿革（5/10）

・官僚たちはアメリカ占領軍の意志に逆らい、まず知事を中央の支配下に置くことを策した。 アメリカの指示どおり、知事は形式的には一応住民によって選ばれることにするが、これは徹底的に形骸化してしまわねばならないというのが官僚の作戦であった。 ここで官僚が目を付けたのは「知事の仕事が、地方に関する仕事と、国に関する仕事の両方にまたがっている」という点であった。 今、仮に「国に関する仕事」について、ある知事が協力しようとしない場合どうなるか。 当然国政に支障が生じる。 そのような不都合があってはならない、ということで、国は知事に対して「命令し」「命令の遂行を督促し」「やむを得ぬ場合には罷免する」ことすらできるようにしたのである。 こうして知事は事実上国の出先機関になってしまった。
（編集部注・罷免規定は平成 3 年に削除）

・また、アメリカ側の主張では、地方はそれぞれ独自に条例を制定することができる、ということであったが、官僚たちはここでもちょっとした細工を施した。 すなわち、「ただし、国の定める法律、あるいはそれに基づく政令に特別の定めのあるときはこの限りではない」という一項をつけ加えたのである。「この限り」であるかどうかはいうまでもなく国が定める。 これによって地方の自主性は一瞬にして有名無実のものになってしまったのである。

・またアメリカは、税金の配分に関し、地方がまず先にとり、残りを国がとるという考え方であったが、官僚はこれも巧みに換骨奪胎（かんこつだったい）してしまった。
つまり、税金の使い道の中には、地方と無関係な、国だけの仕事に関わるものがある。 たとえば外交や防衛、そして全国的な規模によるプロジェクト、等である。
これだけは国が先にとらせてもらわネバ、というのが官僚たちの要求であった。

『お役所のご法度』（1995.03.01　宮本 政於）より

官僚主義の沿革（6/10）

アメリカはこれを呑み、その瞬間官僚は勝った。 ある事業が国家的なプロジェクトの一環であるかどうかは、国が判断できることになってしまったからである。 地方都市に駅ビル一つ立てるにしても、それが全国的なプランの一環であると国が主張すれば、その計画は国のコントロールのもとに入ってしまう、という現行のシステムは、実にこの時に源を発しているのである。

・かくして国は財源を自分の手中に収め、地方が泣きついてきたとき「温情によって」事業を許可し補助金を出してやる、という力関係が定着してしまった。 現在、知事や市長の主たる仕事は、中央の省庁へお百度参りをして補助金をとってくることになってしまっている。 これは明らかに中央による地方支配であり、言い換えれば日本においては、地方は中央の出店にすぎぬのである。

・ここまでを要約するなら「日本国憲法に謳われた三権分立も地方自治も、実際には名ばかりのものにすぎず、これが日本における民主主義の実体なのだ」ということになるだろう。

・さて、上記の如く、戦後数年にわたったアメリカによる日本民主化の努力も空しく、日本の官僚たちは、明治以来の「官僚による産業の保護育成」という伝統的技法をそのまま温存することに成功して今日に至っている。 これはいわゆる国家資本主義であって、プラス面をいうなら、これは後進国が先進国に追いつく際にはもっとも効率の良い方法であり、結果として、日本は戦争に負けたにも拘わらず、たちまちにして奇跡の復興を遂げ、高度成長を経て世界の先進国の位置に躍り出たことは諸君の記憶に新しいところだ。

『お役所のご法度』（1995.03.01　宮本 政於）より

官僚主義の沿革（7/10）

・ある意味において官僚は、実際よくやったのである。 強力な規制によって産業を育成し、人々に職を与え、生活を向上させるかたわら、貧富の差を徹底的に調整して、ほとんど理想の社会主義国家と見まがうほどに平等な社会を実現してしまったのである。

・しかし、プラスのあるところ当然マイナスもある。 以下、現在における日本の官僚制の問題点を列挙してみよう。

・最大の問題点はこうだ。 今も述べたように、官僚による産業の保護育成は、後進国が先進国に追いつく際には効力を発揮するが、いったん先進国になってしまって、自由競争によって世界の経済をリードして行かねばならぬ立場になるととたんに有効に機能することをやめてしまう。

・すなわち、今までは先進国の技術をモデルにして、それに追いついたりアレンジをしたりすることだけを目標にしていればよかったのだが、いったん自分が世界のトップに立った場合は、世界をリードするような新しい技術や商品の開発が不可欠になってくる。 しかし官僚の能力は、国民の活力を国家資本主義的ないし社会主義的に規制したり調整したりする方面においてこそ最大の力を発揮するのであって、このような創造的なイノベイターの育成に関しては全く無力どころかマイナス要因ですらあることが次第に露呈し始めてきたのである。

『お役所のご法度』（1995.03.01　宮本 政於）より

官僚主義の沿革（8/10）

・また、産業に対する政府の救済が常に期待されてきたため、産業界において自然な競争が阻害され、結果として、競争力の弱い産業や、すでに時代遅れとなってしまった不要な産業、あるいはまた自由競争に逆行するような商習慣等がいつまでも温存され、社会の新陳代謝を悪くし、社会を効率の良い創造的な体質に絶えず変革して行くことを著しく阻害する結果になっている。

・また、長年にわたる官主導型の行政が続いた結果、社会における官僚の役割は過大なものとなり、官僚機構は肥大し、国民の活動は官僚による無数の規制や許認可によってがんじがらめになり、社会全体が硬直化してしまった。

・あまりにも巨大化した官僚機構は遂には自己目的化し、その結果それは機能集団であることをやめ、いわゆるゲマインシャフト的ムラ的共同体になってしまった。このような組織の中では、人々にとって重要なのは、なによりもまずその共同体に属することであり、共同体の中の秩序や慣習を乱さぬことであり、その共同体の存続に奉仕することなのである。 冒険によって改革を成し遂げようとする者は排除され、現状を変革せずエラーを犯さないことのみを目的として生きる者がよき官僚として評価されるのである。

・官僚の力の源泉は法律を根拠にした許認可の権限である。 彼らはこの権限を維持し拡大することのみを目的に生きている。 彼らは力を増加するため常に新しい政策を立案し、その政策を源泉にして更に新しい許認可の権限を増大しようとする。 もちろん一度手にした権限を彼らが手放すことは決してない。 それがいかに時代遅れなものになろうが、いかに社会の活動を阻害するようになろうが、である。

『お役所のご法度』（1995.03.01　宮本 政於）より

官僚主義の沿革（9/10）

・しかし、官僚制の最大の問題点は次の原理的な一点だ。 すなわち「日本は事実上官僚によって運営されている。 しかし官僚は国民によって選ばれたものではないから、われわれは政治家を選挙によって変えることができても、官僚を変えることはできない」。 従って「国民は官僚の行政に対して不満を持ったとしてもそれに対して異議を唱える手続きを持たない」ということなのだ。 一体どうしたらいいのだろう！ 官僚制はあまりにも巨大化して日本そのものになってしまっているし、また、官僚にとっては官僚制の維持こそが至上命令であるから、彼らに自己改革を期待すること自体ナンセンスである。 また政治家に官僚制の改革を期待しても、官僚制改革のための立法を当の官僚に依頼するような無能な政治家にどれほど望みを託することができようか！

・しかし、それにもかかわらずわれわれは希望を捨てるわけにはゆかない。 今、ごく一部ではあるが心ある官僚のグループが、官僚制の弊害による日本の将来を心から憂え、官僚制をなんとか改革せねばならぬと考え始めていることも確かであるからだ。 もちろん彼らが単独で官僚制の改革に成功するとは考えにくい。 彼らの改革への意志が、外部から官僚制を憂える人々、たとえば、知識人や経済人、ジャーナリズムや市民運動、そして心ある政治家のグループや地方の行政官たちと結びついたとき、初めて何事かが起こるのだろうと思われる。 また、このような際、日本人の一番の弱点である国際世論の力も見逃してはなるまい。 官僚による、特定産業の保護や、日本特有の商習慣の是認などが、グローバルな自由競争の公正さに反するという国際的非難の集中砲火を浴びたとき、官僚たちがいわゆる「外圧」に屈して、それが改革への糸口になって行くことは大いに考えられる可能性である。

『お役所のご法度』（1995.03.01　宮本 政於）より

官僚主義の沿革（10/10）

・ともあれ、われわれ「外側」の人間としては、本書の著者の如く、内部から勇気を持って改革の声を挙げる人々が輩出してくることを心から願わずにはいられない。

・著者はアメリカで精神分析を学び、精神科医として数年のプラクティスを経た後、帰国して官僚となった。 このようなキャリアによって培われたアメリカ的な価値観が本書を貫くバックボーンになっていることは非常に興味深い点だ。

・ある集団の矛盾や問題点は、その集団にとってはあまりにも自然であるため内部の人間には見ることができない。 これらを見るためには外部の視点が必要となってくる。

・本書は、アメリカ人の価値観を持った一人の日本人が、日本の官僚制をいわば一人のアメリカ人として体験することによって成立し、結果として、日本人にとっては全く自然な官僚制という風景が、矛盾と問題点をはらむ異様なものとして浮かび上がった。

・自分の姿を見るためには他者の目を借りねばならない ---- この平凡な真理が、官僚制の如く国家的な大問題にとっても有効であるという事実は、著者と同じく精神分析学に帰依する筆者にとっては感動的ですらある。

1994 年 5 月 1 日

『お役所のご法度』（1995.03.01 宮本 政於）より

官僚主義からの脱却（1/8）

■「三種類」の人間がいる

19 世紀のフランスにバルザックという作家がいた。 彼はこの時代の生活様式を『社会生活の病理』（邦題『風俗研究』藤原書店）という本にまとめて出版したが、彼はこの著書の中で、次のようなことを述べている。

当時のフランス社会は、「労働する人間」「思考する人間」「何もしない人間」、この三種類に分類でき、同時に、この三種類の集団から、「ヒマなし生活」「芸術家の生活」「優雅な生活」という生活形態を送る三種類の人々が生まれている、と指摘している。

これらの指摘はなかなかおもしろい。 なぜなら、現在の日本社会にも十分に当てはまるからだ。

まず日本には、官僚に代表される現状維持のために「何もしない人間」たちが多くいる。 それに加えて、ほとんどの国民は国家というシステムを維持・拡大するための歯車となっている。 バルザックの言葉を借りれば、これらの集団は「労働する人間」に当てはまる。

「思考する人間」はどこに行ってしまったのだろう。 日本的集団主義を維持するためには、「思考する人間」、すなわち変化を促すような人間は不必要なのである。

思考したい、そう思っている人たちも、「ムラの調和」のために、最終的には「労働する人間」という枠の中に押し込まれてしまうのが現実だ。

『お役所の精神分析』（1997.03.10　宮本 政於）より

官僚主義からの脱却（2/8）

それでは日本人の多くはどのような生活形態に組み込まれているのだろう。 それは、「ヒマなし生活」である。

「優雅な生活」を送ることなど、日本的ムラ社会は集団主義がその基本にあるから当然、ご法度だ。

それでは「芸術家の生活」はどうだろう。 これも欧米社会にあるような芸術活動を行うことはむずかしい。 なぜなら、芸術の根底には、これまで教え込まれてきた教え、考え方に挑戦する、という姿勢があるからだ。

欧米社会では「芸術家の生活」は社会の流れを変化させるために大きく貢献した。 ところが、変化させないことが何よりも重要である官僚主導の日本的ムラ社会は、「芸術家の生活」など、存在してほしくないのである。

いや、日本には相撲、歌舞伎、能などに代表される芸術があるではないか、そう反論する人もいるだろう。 でもこうした芸術は、伝統芸能の範疇に入り、既存の考え方を守ることはあっても、これまでの教え、考え方に疑念を持たせたり、体制に挑戦することの重要性を育てたりはしない。

■「何もしない人間」の「ヒマな生活」

このようにバルザックの視点から日本社会を見ていくと、日本では「何もしない人間」が「労働する人間」を管理していると言ってよい。 そしてこうした人々の生活様式は「ヒマなし生活」である。

『お役所の精神分析』（1997.03.10　宮本 政於）より

官僚主義からの脱却（3/8）

個人の生活を楽しもう、そう思っても、仕事の中に埋没する状態、すなわち「滅私」という鞭で自分を打ちつづけることができる人が、日本人としての理想像となっているために、みんな一緒に「ヒマなし生活」を送らざるを得なくなっている。

でも、変化をよしとしない官僚の側からすれば、こんな素晴らしいことはない。 なぜなら「ヒマなし生活」を送る人たちばかりが社会を占めれば、変化を要求するエネルギーも萎（な）えてしまい、社会体制に変化は起きないからだ。

つまり、体制を維持する側が、「消耗の美学」で国民をマインドコントロールしているのである。

■「我々日本人」の「滅私」

（宮本）「私のまわりには組織から疎（うと）んじられているということで、同病相哀れむ、そんな気持ちから共感を示してくれる人たちが結構、多いのです。 ところが、これまでの経験を通してわかってきたことなのですが、彼らの多くは結局、『我々日本人』という発想が根底にあり、私の考えに気づくと失望して距離をおくようになります。 またなかには敵意さえ持つ人もいるのです」

（編集者）「『滅私』の対極にある思想が『個人』とか『自由』ですから、『滅私』を自分の一部としている人は、『個人主義』という直球を投げられれば、それは反発も出るでしょうね。

『お役所の精神分析』（1997.03.10　宮本 政於）より

官僚主義からの脱却（4/8）

私が宮本さんの考え方に百パーセント同調できないのも、きっと『滅私』に汚染されているからでしょう。 しかし『我々日本人』の中には入らない、『滅私』は拒否する、これでは日本社会では孤立するでしょうね」

（宮本）「『労働する人間』で『ヒマなし生活』をよしとする人々と仲間意識など持ちたくありません。 それに自分の信念を貫くことで孤立するのであれば、それは願ってもないことです」

■ 2500 年前のはなし

（宮本）「バルザックの言う『ヒマなし生活』を、日本社会の『滅私』に対比させてみると、共通項があることに気づくでしょう。 きっと、個人を否定した生活に嫌気がさしたからこそ、フランスを含む欧米社会の人々の中に『個人』とか『自由』という考え方が 19 世紀以降、浸透したのだと思います」

（宮本）「 2500 年ほど前、ギリシャの哲学者のヘラクレイトスは『万物は流転（るてん）する』という言葉の中で、変化への適応の重要性を説きました。

すなわち人間が生活を送るうえで、変化は避けられない現実であるということなのです。 ところが日本の官僚は、『個人』という『人間性』を中心にした考え方への変化を拒みつづけています。 そして『人間性』という物差しで彼らの行動を見ると、200 年どころか 2500 年ほど遅れているのではないですか」

（宮本）「バルザックは『優雅な生活とは、休息を楽しくする術 を言う』と言っています。

『お役所の精神分析』（1997.03.10　宮本 政於）より

官僚主義からの脱却（5/8）

私は休息を楽しく送ることを厚生省のみんなの前で隠そうとしませんでした。 それが軋轢（あつれき）の原因となりクビになったのです。 だからとりあえず『優雅な生活』をちょっとはかじる資格はあるのかもしれませんね。

でも彼は、『優雅な生活』の定義として、身の回りにある品々をすべて優雅なもの、趣味のよきものにしてゆくこと、とも言っています」

（宮本）「アルキメデスはお風呂の中で、『アルキメデスの原理』を発見しましたが、こうした理論と実際をうまく結びつけるようなことができたのも、休息を楽しくする術があったからこそでしょうね。 そう考えていくと、『滅私』と決別できて、はじめて『優雅な生活』の第一歩が踏み出せるわけですね」

■ 快楽原則を忘れている

私はどうして日本人の多くが「労働する人間」で、「ヒマなし生活」を送ることが人生の究極の目的のように思い込んでしまっているのか、これが不思議でならない。なぜなら人間の深層心理には、快楽原則という楽しみを追求する本能があるからだ。

こうした人間の基本をも否定するほどの価値観に支配され、そこから抜け出ることができなくなったのが日本人なのである。 そして、このシステムに変化をもたらさないようにしている人々が官僚だと言ってよい。

『お役所の精神分析』（1997.03.10　宮本 政於）より

官僚主義からの脱却（6/8）

19 世紀の歴史家で政治学者でもあったアレクシス・トクビルは、「民主主義の時代は、実験と革新、そして冒険の時代である」と言っている。

また、第 32 代アメリカ大統領のフランクリン・ルーズベルトは、民主主義についてやはり次のように述べている。

「民主主義には実験の精神が必要だ。 そして実験が仮に失敗しても、率直に認めて別のやり方を試せばよい。 大切なのはやってみることだ」

しかし前述のアレクシス・トクビルは、「民主主義のもとで、人々が新しい理論を危険視し、革新をすべて苦役とみなし、社会の進歩をすべて革命につながる踏み台とみなし、行き過ぎを恐れるあまり一歩も先に進まなくなる状況が到来することを危惧せざるをえない」という悲観的な予測もしている。

この 150 年以上も前の彼の洞察力は、そのまま日本の官僚たちに、そして日本社会に当てはまる。 なぜなら、日本は規制撤廃し個人を中心とした社会への変換が必要であるにもかかわらず、いっこうに改善される気配が見られないからだ。

まさしく彼が指摘している「行き過ぎを恐れるあまり一歩も先に進んでいない」という状況下にあるのが実情だろう。

そして、日本的システムを理解すればするほど、「新しい考え方に対する、実験、革新、冒険」などとは無縁な社会であることが見えてくる。

『お役所の精神分析』（1997.03.10　宮本 政於）より

官僚主義からの脱却（7/8）

■「いらだち」から何かがはじまる

旧東ドイツ出身のフランク・カストルフ氏は、旧東ベルリンのフォルクスビューネ（民衆劇場）の監督を任された。 それまでこの劇場は停滞していた。 多くの旧東ドイツの非生産的な企業と同じ運命をたどっていたわけだ。 ところが、彼が監督になってからというもの、劇場は活気をとりもどし、1994 年には「最高の劇場」とまで批評家に絶賛されるようになった。

なぜ彼が絶賛されたのか。 ニューズウィーク紙によれば、それは彼の、無秩序な、そして挑戦的な演出と荒削りの創造エネルギーが演出の中につぎ込まれたからである。 この姿勢が脚光を浴び、ある取材の中で彼は、

「私たちは人々を挑発し、いらだたせたい。 別の角度から物事を見せたいんだ。大切なのは人々のホンネだ。 タテマエではない」と、このように語っている。

どうして私がこの日本では無名に等しい演出家のことを持ち出したのか。 それは、旧東ドイツ社会が非生産的で停滞している状態と、現在の日本的ムラ社会の停滞には類似点があると思ったからだ。 どちらも官僚によって自由競争が妨げられ、非効率的な部分が顕著である。 またタテマエが重視され、ホンネを語ることができない。 こうした部分がそっくりだからだ。

『お役所の精神分析』（1997.03.10　宮本 政於）より

官僚主義からの脱却（8/8）

そして日本的ムラ社会で受けたマインドコントロールから抜け出るには、カストルフ氏のような自由で挑戦的なエネルギーが不可欠だ、そう思ったからでもある。

日本ではカルストフ氏のような監督がいなくても、一人ひとりが「いらだち」を導き出すことができるはずである。 日本的集団主義のマインドコントロールの度合いは、旧東ドイツのそれにくらべればはるかに弱いからだ。

タテマエは集団を、ホンネは個人を優先させる。 精神分析では、「個人」とは人間そのものなのである。 個人を中心として物事を考えるようになれば、たちまちマインドコントロールは効かなくなり、自分の置かれている環境に「いらだち」を覚えるようになるはずだ。

「いらだち」を感じることでこそ、日本の制度の本質を知ることができ、「労働する人間」こそ人生だ、という教えにも疑いの心を持てるようになる。「いらだち」という刺激は、「ヒマなし生活」のサイクルから脱するきっかけとなる。 その結果、休息を楽しくする術を獲得し「優雅な生活」を送ることができるようになるのであれば、こんな素晴らしいことはないはずだ。

『お役所の精神分析』（1997.03.10　宮本 政於）より